

啄木全集

第四卷

# 啄木全集

## 第四卷

筑摩書房

啄木全集 第四卷 評論・感想

一九六七年九月三十日 初版第一刷発行  
一九七四年八月三十日 初版第八刷発行

著 者 石 川 啄 木

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

株式会社 筑 摩 書 房

電話 東京 〇七六五一（代表）  
振替 東京 四一二三  
郵便 番号 一〇一―九一

本文用紙 三菱製紙  
表紙クロス 東洋クロス  
印刷 矢島製本

(分類) 0392 (製品) 70804 (出版社) 4604

## 目次

### 評論・感想

『草わかば』を評す

寸舌語

五月乃文壇

ワグネルの思想

無題録

詩談一則

戦雲余録

洪民村より

秋草一束

わかば衣

閑天地

岩手県師範学校校友会雑誌を読む

古酒新酒

林中書

六月の雑誌界

秋風記・綱島梁川氏を弔ふ

小引

秋風記

綱島梁川氏を弔ふ

一握の砂

冷火録

卓上一枝

北海の三都

悲しき思出

空中書

三 六 二 五 四 三 二 一 五 四 三 二 一

八 九 二一 二四 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

|                 |    |                |    |
|-----------------|----|----------------|----|
| 日曜通信            | 一四 | 卷煙草            | 二五 |
| 消息              | 一五 | 性急な思想          | 二四 |
| 榜牛死後            | 一五 | 硝子窓            | 二四 |
| 一握の砂            | 一五 | 我が最近の興味        | 二五 |
| 胃弱通信            | 一六 | “NAKIWARAI”を読む | 二五 |
| 汗に濡れつゝ          | 一六 | 紙上の塵           | 二五 |
| 氷屋の旗            | 一七 | 時代閉塞の現状        | 二五 |
| 一日中の楽しい時刻       | 一七 | 所謂今度の事         | 二六 |
| 百回通信            | 一七 | 窓の内・窓の外        | 二七 |
| 弓町より（食ふべき詩）     | 一七 | 吉井君の歌          | 二七 |
| 文泉氏に与ふ          | 一八 | 暗い穴の中へ         | 二七 |
| 文学の値下           | 一八 | 一利己主義者と友人との對話  | 二八 |
| きれぎれに心に浮んだ感じと回想 | 一九 | 田園の思慕          | 二八 |
| 文学と政治           | 一九 | 無題（幸徳等所謂……）    | 二八 |
| 一年間の回顧          | 二〇 | 歌のいろ／＼         | 二九 |

大硯君足下

二九六

日本無政府主義者隠謀事件経過

無題（人間の悲哀とは、……）  
無題（我が田に水を引く……）

三六〇

及び附帯現象

二九八

農村の中等階級

三六三

第十八号室より

三三〇

小説「墓場」に現れたる著者木下氏の

郁雨に与ふ

三三八

思想と平民社一派の消息

三六三

日露戦争論（トルストイ）

三三七

弓町より（一）

三六六

A LETTER FROM PRISON

三三〇

無名会の一夕

三六七

平信（与岡山君書）

三六〇

新しい歌の味ひ

三六八

病室より

三六七

## 断片

## 雑録

無題（莫迦な考へだが……）

三六三

七日の記

三七五

汗に濡れつつ

三六四

死

三七六

無題（或国民、乃至或民族の……）

三六六

嗜好

三七七

風満楼書（一）

三六九

きれぎれに心に浮ぶ感じと回想

三七七

無題（私は漱石氏の『それから』を……）

三六七

不穩

三七八

日比谷の雨

三六七

莫復問書（一）

三六

抒情小曲集“思ひ出”

四四

所感数則

三六

参考資料

哲学の实行

三九

『ゴルキイ』を讀みて

四七

赤墨汁

四〇

夏がたり

四八

無題（クロボトキン翁の……）

四二

乞食と語る

四〇

無題（明治三十六年は……）

四三

女郎買の歌

四二

解説

小田切秀雄

四七

解題

岩城之徳  
昆 豊

四九

評論・感想



## 『草わかば』を評す

蒲原有明子の詩集『草わかば』頃日漸く世に公にせられた。新創日猶淺き我新詩壇に斯様な書の頻々と出版されるのは仲々頼もしい事である。

子の詩由来才氣の溢れた作が多い。世人がよく晦澁を責めるが、之が正しく子の短所であると共に又長所でなければならぬ。詰り才の走り過ぎた所は攻撃を受ける点であるが、然し其所に又捨つべからざる妙味が存するのだ。此書の造詣する所は蓋し少なくはあるまい。

『草わかば』一冊収むる所凡て二十三篇である。内で「高潮」庄巻の作、他は「日神頌歌」「彩雲」「君やわれや」「牡蠣の殻」「ゆふづつ」「夕かげ」「問ふを止めよ」「憂愁」「追懷」「かすかに胸に」等も見るべき代物だ。以下漸次批評を試むることしよう。

「高潮」之は此書中の最長篇である。して又白眉なのだ。

愁は谷の霧なれば

思ひは暗き沢がくれ

捨つべからざる好句だ。

流転よ暫時立ちかへり

翼収めて虚空に見よ

野の花わかき髪に添ひ

森の香健き胸に入る

此一聯なんと美はしいではないか。前の「母なる地の飲楽に塵もこの時また聖し」からうけて、曙の歌としては蓋し絶妙な句である。

「法の曙の光もいつか影斂め傷みてひとり嘆きつつ懷疑の途人走る」時に自然の曙は如何なる光明を与へるであらうか。

奔放なれかゝる世や

熱慕情にただ嚮へ

微閑き空いかばかり

雲華やかに染め来ずや

うち咽ぶ海またここに

潮ふたたび満ち来ずや

然らずや高き遠き見て

明けゆく磯にわが立てば

この曙に白銀の

狼箭弓弦を断つがごと

雄々しき魂の生れいで

この曙に琴のねの

祝ひの歌を曳くが如

やさしき魂の声あげむ

『草わかば』を評す（承前）

何らの雄々しい詩情！希望湧くが如しである。此篇は最も大胆に大自然を讚美した歌で、作者の熱情は何所にも溢れて見える。如何な宗教でも末法は乱れて来る。勿論人々の心なども廃れた時でさへ、大自然は儼然として少しも乱れず、廃れず希望に輝いて居ると云ふ。なんとサブライムな事ではないか。新体詩新創以来有数の作である。

『日神頌歌』も好い。

春の霞のもろつばさ

まだかよわげに見ゆれども

おほはぬ空もなかりけり。

氣に入つた句だ。『夜の閑消えてゆく空に』の一聯も佳。

『彩雲』一篇行末を思わづらふこともなく、流れてゆく彩雲の榮ある幸を羨んだ歌、まさしく之れ厭世だ。

誰かおもはむこの時し

なかぞら高き紫の

雲ゆふまぐれ消え去りて

幻影つひにたえむとは

『君やわれや』此のみは五七調である。最も藤村臭味を帯びた作。全体毫もゆるみなく、句しまりて『高潮』に次ぎての佳作なり。何所にも瑕なき中に結句殊にめでたし。

君が恋あまりに高く

黄昏も知らぬ光や

浮雲のかげにもあはれ

たふれゆくわが身およばじ

『牡蠣の殻』着眼面白し。結末の一聯出色の文字。

『ゆふづつ』此も仲々の作だ。予にあらざれば蓋し模倣も

出る者もあるまい。『嗚呼何ぞ人の世われに夕短かき』う

れしい語だ。

『夕かげ』悲しい作。悄然として瘦せほゝけた若人が、胸

に手でもあてゝ夕雲のさびしさを眺めて居る様な所が目

ちらついて来る。

彩ある雲に慕ひよる

愁ひの影の夕暮の

魂の少女のくろ髪

にはひもあらぬ空のうへ

『問ふをやめよ』、かゝる小品にも作者の熱情を見出すことが出来る。此は珍らしき八六調である。

### 『憂愁』

はてなき空を流れ去りて  
星の光も消ゆるごと  
愁ひのかげは時として  
胸深くこそおちにけれ

げに人の世のことわりの  
深きにはひもたそがれて  
浅瀬すべなきわづらひの  
流に夢はみだれけり

魂の身かをる桂かげ  
天なる光恋ふれども

身はいたづらに沈みゆく  
卑きなやみをいかにせむ

『追憶』、『かすかに胸に』、後者やゝ晦渋の嫌ひあれどさすがに共に捨て難しだ。

斯う一通り熟読して来る終りに有明子に対する希望は二つある。と云ふのは、用語を撰択して文字上の晦渋をさけ

ることと、一つは構想取材の範圍を拡張して貰ひたい事である。

第一の要求は、詩本来の性質として声律乃ち音楽に供ふ可きであるから、云はずとも当然の事である。して有明子の詩は何所が調の洪態であるかと云ふことは、読む人の直ちに領得する所であらう。第二の方は氏も多少心付いたらしく、『高潮』などは此点に於ても成功して居るが、今一層諸方に手を拡げて貰ひたいのだ。必ずしも豆大な厭世観や惡愛許りが詩と云ふ筈はあるまい。

こゝらで筆を擱くとしよう。之れは自分のみの考へであるから、若し諸兄らの懇ろな御教訓があるならば生にとつて甚だ幸ひな事である。

〔岩手日報〕明治三十五年一月十一、十二日

## 寸舌語

### (一) 写実の意義

自分は写実主義を否定する者でない。否むしろ芸術界に存在すべき当然の理由を認めてをる。然し乍ら『写実』と云ふ意義は少からず世人に誤解されては居ぬだらうか。之れが自分の疑を存する点である。

一切の理想を虚偽として排斥し、芸術唯一の対境は実在体の外にないと云ふのは、写実主義の本旨である。して之は、種族は実在性を有せず実在せる者は個体のみと云ふ動かすべからざる真理の上に立つた主張であるが、理想と云ふことを極めて狭義に解した所は此主張の欠点である。何となれば此の如き主義者の所謂虚偽なりと云ふのは、種族的理想の外に具像理想の存在を認めないための誤りである。が抽象理想論の空漠たる範圍から芸術を自然界に復活せしめる為には、慥かに有力の方便たるを失はない。自分は先きに芸術界に存在すべき理由と云ふたのは茲の謂である。

で詰り、写実主義は抽象理想論から芸術を復活せしむる

一ケの方便たるにすぎないから、斯の如き主義者の作物は決して永遠の価値を有すべき筈はない。然るに、現今吾文藝界に於ける写実主義の作物は何うであるか。その傾向は如何であるか。自分の疑を存する点は詰り此所である。

煩瑣なる描写のために、折角作つた読者の頭から美的印象を壊して仕まつた作物、淫卑な事を明らかに描いて却つて悪感を引き起した作物、これらは所謂写実主義の頭領小杉天外の近業に見る所である。自分は決して天外一輩のために言をなす者ではない。斯の如き悪写実の流行を許して置く吾文壇の意気地なきにあきれるからである。

写実主義は、芸術を自然界に復活せしめた。然し乍ら、夫自身も大なる欠点がある以上は復活せしめたのみならず、更に之を完全にしなくてはならぬ。此点から見れば彼作者は、実に芸術の邪路に迷ひ入つた者と云はなければならぬ。

然らば如何にしてかゝる冗漫贅疣の弊から之を向上させやうか。此問題は蓋し如何にして写実主義に真生命を与へやうかと云ふことである。曰く、写実主義を以て単に個体（実在体）を模写するに止まらず、更に進みて個体的理想の恰当なる発現たる個体美を写すに至らしむべし。茲に於て先に云ふ写実主義の定義と少くとも一ケの矛盾が生じた

ことがわかるであらう。

然し乍ら此は自然進化の当然なる理法である。詰り、写実主義がより完全に近く、ために先の欠点をすてゝ具象理想論に一步を踏み入れたので云はゞ矛盾にあらずして進歩である。

で、写実主義の理想は、先の極端なる摸写主義をすてゝ、個体的理想の発現に必要な限りに於てのみ实在界を写すと云ふに進歩したのである。

## (二) 新刊雜評

◎『無花果』の名声漸く文壇の埒外に葬り去られんとして春雨氏の新作『のぞみの星』近刊の新小説に現はる。宗教の奇蹟を信ずるを以て一切迷信なりとし、哲学の研究によりて大宇宙の理法をきはめんとする一青年を主人公とし、真率にして使徒保羅を自任し、布教を天職と信ぜる勤儉の老牧師、嬌容雨中の海棠花の如くして怪しき運命の手に狂奔せらるゝ一少女、困難なる学費を割りて病友を養はんとする俠骨漢等、交互錯綜して一篇の脚色をなす、能く理想と実世相恋愛を親子の情等の衝突を描いて極りなき変化あり。末段に至り、望み多き青年と愛すべき少女と互に手を取りて脈々たる青春の血各の肥に溢れ、一導希望の光明を

望みて莞爾たりと云ふに巻を終る。篇中到る所、作者の限りなき同情と動かすべからざる信念のほのめくを見るべく、特に筆致漸く老熟の境に入らんとするを認む。『無花果』に比して多少の不自然なる点なく、冗漫なる記事を欠ける、或は一頭地を抜くの傑作たるに非るか。由來今の文壇に於ける新進作家として最も矚目すべき者、蓋し氏を描いて求むべからず。裏の『黒塗馬車』に於て吾人は限りなき清新の詩美を味ひ、頗る感謝の意に堪えざりき。今又此篇に接して近來の文界に対する不平大に消散するをえたり。此篇殊に注意すべき者、作中の人物一人として悪人ならざる一事之なり。青年・少女・牧師は勿論、放逸なる苦学会の書生に至るまで、何れか人の嫌惡に価する者ぞ、性格の描写、少女の心裡活動の行徑を描くに、少しく筆力の足らざるを恨みとするのみ。

◎同号田村松魚の『二人妻』拙劣見るべからず。ワルデルゼーの小品の訳『幼心』、着想の新奇なる点に於て、果た裏面の思想の一語一句の間に現れ出でたる点に於て、さすがに大家の風采を覗ふべし。紅葉訳物に筆を染むる、蓋し文壇一般の囑する所なり。『海外文壇』の中島島鳥氏に於ける、真率なる報導と適切な評論に富むを多謝す。

尚同号の写真に、露国の新文壇王マキシム・ゴルキー氏

の肖像あり。燎々たる霸氣眉目の間にあふれ、宛然、氏が放浪者主義の真風貞に接するの感あり、以て珍とすべし。  
(以上新小説第三卷)

◎『太陽』誌上の姉崎博士の論文『高山樗牛に答ふるの書』完結せり。其高邁なる識見欣度すべき態度共に能く一世を圧すべし、彼の独逸の文明を痛罵し、日本現代の風潮を諷刺するに至つては吾人案を拍つて叫ばざるをえず。ニイチエを説き、ピリチスムを説き歐洲文明の思潮を透視して祖國幾多の迷へる者を諷む。其暗々裡に樗牛氏を諷する想と筆と共に近來の大論文なり。

◎高山博士病重りて枕に就くと、蓋しわが文壇の恨事なり。文芸時評の欄、桂月氏代りて筆を取る。愚劣遂に見るべからざるを如何にせん。天溪の『新思潮とは何ぞ』汝何ぞしかく没分曉なる。然れどもニイチエニズムの誤りたる反面の評として、吾人斯の如き論者あるを忘るべからず。◎風葉氏の小説『無名詩人』は、漸く氏の取材方面に変化あるを見るべく、『魯庵氏』の貴婦人上流社会の婦人を罵り得て痛快を極む。(以上太陽三号)

### (三)『若き妻』を評す(上)

幽芳氏の新着『若き妻』前篇去月春陽堂より公にせられぬ。吾人嘗て氏の『己が罪』を読み、作物に忠実なる熱誠の氣と掬すべき同情の面影を認め、囑するに多大の希望を以てしき。今此著に接して喜ぶこと限りなし。少しく読余の所感を記して読者と楽まんか。

「二十歳の時妻を失つて偏屈に生長した女嫌ひの三十八歳の博士がある。恩師幸部博士の遺言によりその愛娘十七歳の房子の後見人とならねばならぬので大に困つた。女学生と聞いて多分カンガルーの様にビヨコ／＼するお転婆と思ふて居たが、相見るに及んで房子が左程惡むべき者でないことを悟ると共に、其養はれて居る房子の伯母の冷酷を非常に惡む様になつた。房子はこの角岡博士に親むと反對に、伯母とは常に庄轢がある。或夜遂に烈しい口論した末、拔出して博士の家を訪ふて将来の身の置き所にさしてくれと云ふ。博士は大に苦むが房子は仲々論してもきかぬ。その夜は博士が妻の遺子双児の二少年の乳母の情けで、兎や角房子は宿つた。明朝博士は自分の妹(伯爵夫人)を尋ねて房子を置いてくれと頼み、承諾をえて歸つて来ると、房子の伯母の竹川と云ふ昔は御殿女中を勤めたと云ふ、今でも殿様から拝領の錦袋入の懷剣を肌身はなさぬ老女がきて房子をつれて歸らふと云ふ。博士は其友曾根工学士に托して

竹川の応接をさせる。曾根は詭弁をふるつて竹川をおどし、博士に房子の身を委ぬると云ふ委任状を書かせる。処へ居らぬと云ふて詐つて置た房子が現はれる。竹川は大に怒るが既に仕方がない。そこで房子の養育料何千円かを返さぬことにして房子を博士の手に渡し帰つてしまふ。曾根は房子の感謝する嬌客に見とれて恍惚とする。」

斯くの如きを一篇の梗概とす。此篇元より未完の作。以て早見たる批評に律すべからずと雖ども其特色とする所、脚色の奇なるに非ず、行文の豊麗流朗の故に非ず、実はその性格の描写最も精細にして、一言半句の内尚其人物の限りなき活動を感じる所に存す。

之を房子に見ば、初対面の角岡博士に向つて曰く、「貴君、あの伯母をお尋ねくださいましたのですか。生憎と伯母は……否、あの善い按梅に留守なんで御座いますの、妾でも宜いんでしょ、妾、是非ともお目にかゝらなければならぬですから」

かくの如きは実に彼の女が人を懼れざる天真の一面「あの善い按梅に留守なんでございますの」の一語伯母の苛責に堪へざる小さき胸奥の秘密を、未だ遇はざるに既に信じたる博士に初対面の席に於て訴へんとする。心中実に真情の流露せる者、一点の邪氣をも含まざるなり。人を懼れざ

るは胸中寸毫のけがれならざるを以てのみ。而して其他の一面に不撓にして屈せざる性、「妾は伯母に限らず、妾を小供かなんかのやうに思つて、何もかも指図しやうといふんは大嫌ひです、妾は一々人に干渉されることが一番厭ですから……」と云ふが如きを見る。之れ彼女が情に激しては時に伯母を罵り、又は其家を抜出る等のことある所以にして其活動の主なる原因なり。然れども一旦常の天真にかへれば飾らざるに麗はしくあらざるに愛らしきなり。見よ不屈なる彼れは其後見人に対して、

「妾は伯母の自由にならないやうに、貴君の自由にだつてなりやしません」

と云へども天真なる常態に於ては如何にその心の美はしきよ。

「けども父は時々妾の事を『ふうさん』て云ひますの。ふうさんなら造作もないでしょう、どうぞお願いですから、ふうさんと呼んで下さいな、貴嬢と仰しやらずに」彼が之を十七歳の少女が蓬髮乱髻の博士に対して云ふ語となさんや。然ども彼女概ね斯の如きなり。

#### (四)『若き妻』を評す(下)

房子の性格既にかくの如し。其到る処躍々たる波瀾を生

じ、錯綜する曲折を起す者、又自然のことに属す故を以て一篇の主人公は角岡博士なるに不拘、総ての活動は房子を中心として現はれ、感情以外に何物をも有せざる彼女の心をして時に狂瀾にのりて天心に中するが如く、時に妖雲に跨りて千尋の奈落の下に落つるが如く、決して平坦なる行路を歩ましめざるなり。其間恐るべき運命の手は常に彼女を追ふて抔り、益々危険なる境界に近かしむ。若し夫れ其境地に至りては、吾人之を中編以下にまたざるべからず。兎に角房子は氏が描きたる女子の内、限りなく生くる一人なるべし。角岡博士は終始世慣れざる陰鬱の学究先生として、はか／＼しからざる心裡にはか／＼しからざる径行を描く。先に十七歳の少女の為に転々として奔弄され、中頃老女竹川のために一も二もなく悩まされ、終りには遂に出る能はずして曾根学士に依頼するに至る。かくの如く消極的な人物の風采は、其言語の間に直ちに髣髴し来るが如きを覚ゆ。試に其二三を揚げんか。

房子のために後見人とは如何なる者かと問はれて、博士は顔を赤くし「後見人といふのは——後見人なるものは——その、その——後見さるゝものゝために常に幸福ならしめ、ソノ満足ならしむる事を謀るべき、ソノ義務ある者で——と信ずるで」と窮する状、又は竹川老女のためにま

くしかけられて、遂に「いやわかりました、確とわかりました、如何にもご尤で——、御尤で——」と云ふが如き眼鏡をあげ下げして、口吃る様、常に読者の眼前にちらつくの感あり。其悶煩の心理的活動の如きも巧に写されたり。老女竹川は常に『御殿女中』の性格を現じて其拝領の懐剣を肌身はなさぬと云ふ氣質躍如たり。曾根は所謂当世風の才子肌、これも性格の描写に些の欠点なし。

以上説く如く、篇中の人物は何れも完全に個性の深処まで描かれ、殆んど間然する処なきが如し。文章の如き、会話の如き、何れも『己が罪』時代より余程の進境あるが如し。

かくの如きは実に予が読余の些細なる所感、其脚色の如きは希くば全篇出版の後にせん乎。兎に角本年に入りしよりの春雨の『のぞみの星』と対すべき傑作の部に入るべき者、或はこの方優るとも劣るなきなり。吾人氏が芸術に忠実なる、かくの如き感謝す。

（『岩手日報』明治三十五年三月十一、十四、十八、十九日）